

「英語教科書の挿絵が語るもの」

寺田寅彦（東京大学）

挿絵研究は、たんなる図像学を越えて、領域横断的なアプローチが必要不可欠な研究分野である。その例を『明治文学の彩り 口絵・挿絵の世界』の解説に見てみよう。

口絵・挿絵から見る明治文学。そこには、単に文学作品の世界をビジュアル化したというだけでなく、<文学>や<作品><作者>といった概念そのものを揺り動かし、美術史・出版史・書誌学・法制史といった様々な分野につながる問題系が浮かびあがっています。その総体を考えるには、各分野に細分化した学術研究のアプローチでは不可能で、画文が一体であるという前提で領域横断的に考える、「画文学」の発想が求められるのです¹。

これはほんの一例に過ぎないが、テキストとイメージ（あるいはイメージとテキスト）の関係の観点から見た挿絵研究がいかにも多くの研究領域を巻き込むものであるかを示してくれている。一方で、教科書やマニュアルにおける挿絵の役割は、とりわけ教育心理学の観点からその教育効果を論じるべくさまざまな実験報告・分析とともに研究が進んできた²。

本発表では、英語教科書という本来の目的（英語という外国語の習得）が明白である媒体を扱うことで、その挿絵とテキストとの一致・不一致に着目して、教育効果という観点からだけでは理解できないテキストとイメージの複雑な関係を検討する。また、複数の国で作られる英語教科書を扱い、社会的・歴史的な背景と合わせて吟味することで、教育における挿絵の使用がいかにも社会や政治の要請に応じたものであるかを分析する。また、この国際比較では、フランスの英語教科書が比較的早い時期から英語教科書に挿絵を入れて英語教育を行っていたことも付随的に概観する。これらの考察から、テキストによって語られることとイメージによって語られることが、重層的なメッセージとして英語学習者に発信されていることを確認していく。

¹ 出口智之「口絵・挿絵という問題系 画文学に向けて」（日本近代文学館（編）『明治文学の彩り 口絵・挿絵の世界』春陽堂書店、2022年、179頁）

² 島田英昭、北島宗雄「挿絵がマニュアルの理解を促進する認知プロセス—動機づけ効果と精緻化効果—」（『教育心理学研究』第56号、2008年、474～486頁）など。

発表者は言語学を専門とはしていないため言語学的な考察を深めることはできないが、「イメージとことば」をテーマとするこの談話会に横断領域的な議論の素材を提供し、言語学の観点からのご指摘をいただければと考える。